

「非僧非俗」について考えてみよ

全曹青広報副委員長 釜田尚紀

教界のゴシップもよく耳にしていたし、こ それまで勤めていた仏教系出版社では、仏 かしい。「本物のお坊さん」ってなんやねん。 値観を持つ僧侶になろうと思った。一方で 僕は師匠にこのように宣言した。 離婚をきっかけに、社会とはまた別の価 しかし……、今ふりかえるとかなり恥ず

世間では不祥事とされる出来事 ツコツと修行しますという、そ 引き受け、とにかくまじめにコ がよくわかった。 えないことがたくさんあること の実情を知ったり、本物といえ れからはそれらも当事者として る僧侶にも出逢い、外からは見 んな意気込みだったのだと思う でも実際、この世界に入り、

きっと僕にも日本仏教の現状がようやく肌 る必要がない気が最近はしてき 撤回、多分、僕は死ぬまで本物 で実感できてきたのだ。 た。別に結婚願望が芽生えたわけではない。 っていたけれど、それもこだわ になれない。結婚もせんとか言 そのうえで正直に言う。前言

仏教〟だったー だった。でも僕が出家した先は、実は、在家 僕は3年前、覚悟を決め出家したつもり

在家の優婆塞・優婆夷ですよ」。 あなた達結婚してるの? 釈迦さまも道元禅師も、もし今の宗 侶を見たらビックリするだろう。「え いいのは

> を捨てているからこそ自由だったのに、僕 ョイスを与えられ、変容を受け入れた。 らは明治政府の政策の一環で肉食妻帯のチ 家ではない。仏教は何物にも執着せず全て そう、本来の教えでは結婚していれば出

社会人をやめて僧侶になると決めたとき、

もう結婚はしません」。

るからには本物のお坊さんになる

さえ簡単に翻弄されてしまう。ここまでい それは信仰が基本的に法治国家に住まうと いえる。しかし、ともすると世間の常識に ト個人単位によるのだから当然の帰趨とも 今の日本仏教は社会のルールと共に在る。



見えづらい境界線上で迷ってしまう。 けてきた日本仏教の側面。ただ僕らはその くとおかしい。でも、これもまた変容し

れを望むのなら、その時は結婚してみても 教者として誠実にお付き合いし、互いにそ が現れるかもしれない。そして、もし一仏 緒に仏教をしたいと願う未来のパートナー ないけれど、そんな活動の過程でお寺で一 生き生きしてくるだろう。また、保障はし 共にあれば、自ずと活動現場であるお寺も

間の雰囲気を漂わせていたら大問題。また 話が違う。寺院には聖域としての空気が備 対的な社会との境界線を見ている。 ありえない。僕らはここに僧侶としての絶 僧衣でラブラブデートなんていうのも絶対 わっている。もし本堂が一般家庭のお茶の ところが「お寺」とか「宗門」単位になると

出家と在家という線引きは実に分かりや

自分達にとってどういう存在になるのか? 非俗」を僕ら個人が受用したなら、仏教とは 今それはしばし横に置いておく。この「非僧 なくてはならないことが山ほどある。でも、 お寺の運営にはそれぞれに課題があり、考え 場を表現された「非僧非俗」そのものである。 体何者だ? 出家でもない、在家でもない だ中身が全く違う。じゃあ結局、僕らは れる人々はいる。見た目は僕らと同じ。 すかった。いま日本にもまだ出家者と呼 これはまさに親鸞聖人が自身の信仰の立 は出家・在家を問わず共通すること。 教とは職業でなく「生き方」だ。それ

ることを感謝しつつ、仏教者として社会と ど、僕らは胸を張って僧侶として生活を営 感じた生き方と職業がマッチした、夢のよ そうすると、僕ら僧侶とは自分が最良だと んでいけるのだと思う。そして仏弟子であ うな存在であると言うことができる。 そこを押さえれば、ジレンマは残るけれ

なら僕も真似してみたい。 定はないけれど、こんな素敵なプロポーズ 蔵随聞記』を手渡されたとのこと。結婚の予 僕が一番好きな本です」と言って、『正法眼 いいんじゃないだろうか? 実成師は、結婚されるとき奥様へ、「これは シャンティ国際ボランティア会の故有馬